



土木遺産の香 第86回

西廻り航路の拠点として栄えた湊町「酒田」 山形県酒田市



パシフィックコンサルタンツ株式会社／コーポレート人事部
油谷 百百子／ABURAYA Momoko
(会誌編集専門委員)

酒田の概要

山形県北西部の最上川河口に位置する酒田は、日本海や最上川を中心とした海運・舟運によって繁栄した人口約10万人のまちである。日本海に面した酒田湊は、出羽の国府の湊として発達したが、度重なる河川の洪水により最上川の流路と水深が変化し船の停泊が不便になったため、1504(永正元)年頃から約100年かけて住人も港の機能も南岸の向酒田から北岸の当酒田に移転した。

江戸時代初期に西廻り航路が整備され北前船の往来が盛になると、酒田のまちは飛躍的に発展した。酒田の繁栄の原点となった西廻り航路は、なぜ整備されたのだろうか。

酒田の開祖

酒田が初めて文献に現れたのは『義経記』や『吾

妻鏡』である。『義経記』には、源義経が京を追われて奥州平泉に下るところで「坂田の湊」「坂田次郎殿の領なり」とある。『吾妻鏡』には、源頼朝上洛時の供の中に坂田三郎の名がみられる。

1189(文治5)年、源頼朝による奥州平泉・藤原氏討伐にあたり、藤原秀衡の妹、あるいは後室と言われる徳の前が、36人の家臣に護られて秋田から羽黒山麓そして庄内に落ち延び、最上川南岸の袖の浦に逃れてきた。尼となった徳尼公はこの地に尼庵「泉流庵」を建て、藤原一門の冥福を祈り静かに暮らしたとされる。

住み着いた36人の家臣の子孫は、廻船問屋を家業とし「三十六人衆」と称する自治組織を形成して町政にあたり、酒田の発展に尽力した。現在でも、毎年徳尼公の命日の4月15日には、酒田三十六人衆ゆかりの人々が泉流寺に集まり供養を行っている。



河村瑞賢像

西廻り航路の整備

江戸時代に入り、庄内及び最上川流域の年貢米輸送が一層増大し、酒田湊は米の集散地として飛躍的に発展した。酒田が取り扱う米の大部分は大名の年貢米である。最上川を下って集められ、酒田で地払い(換金)され、商人の手で商米として遠隔地に販売された。その後、諸藩は年貢米を廻送する体制を整備し、敦賀・大津・京都・大阪・江戸などで販売するようになった。

江戸の人口が増加して米の需要が活発になると、幕府は御城米(幕府直轄領からの年貢米)を安全に迅速に江戸に運ぶ必要に迫られ、西廻り・東廻りによる直送を試みることになる。幕府は御用商人である江戸の正木茂左衛門・伊勢屋孫右衛門に、西廻り航路による出羽国御城米の江戸廻船を請け負わせた。しかし、無理な航海による海難事故や商人とのトラブルもあったため、1672(寛文12)年には、前年に東廻り航路の江戸廻船に成功した河村瑞賢に西廻り航路開拓を命じた。瑞賢は明暦の大火(1657年)の際に材木を買い占めて財を成した商人で、その後は河川や運河の整備等の土木事業に携わり、江戸時代の国土整備に貢献した人物である。

西廻り航路の整備にあたり、瑞賢は海路・港湾・水路等の調査を行い、幕府に様々な進言を行った。例えば、船の安全な航行のために寄港地を設定し、寄港地には番所を設けて船や御城米の警護を行い、岩礁のある長門下関湊には水先案内役を備えるこ

ととした。また「航海経験豊富な民間船を雇い、官船の目印として幕府の旗を立てること」「港に立ち寄らずに無理な航行を続けないよう寄港地の入港税は免除すること」「転覆や浸水を防ぐため船の側面に印をつけて過積載を止めること」「酒田の海岸に御城米専用の米蔵を設けること」等である。瑞賢のこうした進言は、安全性の確保に留まらず、官民の役割分担を明確にして民間の力を活用しながら幕府の経費削減も行うというものであった。

1672年5月に酒田を出帆した御城米船は7月に無事江戸に到着した。西廻り航路が整備されるまでは、敦賀で船から積み荷を降ろし、陸路で琵琶湖まで運び、大津までは湖上を渡り、大津からは陸路で伊勢桑名を経由して、再び海路を使って江戸まで運んでいた。水上輸送と陸路を繰り返すこの輸送方法では、日数・米の損傷・費用の点で課題が多く、米の値段にも影響した。瑞賢が新たに設定した西廻り航路は、酒田湊を出帆し日本海沿岸を下り、下関から瀬戸内海に入り、尾道を経て兵庫・大阪に行き、紀伊半島を回って下田または浦賀を経て江戸ま



日和山公園から酒田港を眺める



湊町酒田の繁栄を伝える元料亭「山王くらぶ」



最上川河口地図（酒田港、日和山公園、山居倉庫）（出典：国土地理院地図「電子国土Web」）

で行く。積み荷の積み替えがなくなったことで料金も安くなった上、一度に大量の物資を運べるようになった。

こうして河村瑞賢は、日本海運史上最も画期的とされる西廻り航路の整備に成功し、西廻り航路は庄内藩と内陸諸藩の御城米の輸送やその後の北前船による物流航路として多いに活用された。

酒田湊の繁栄

西廻り航路の整備により出羽国御城米の集積地かつ積出港となった酒田は、天下の台所である大阪と直結するようになり大きく発展した。1683（天和3）年に酒田湊に入った船数は川舟も含めると2,500～3,000隻とあり、賑わいぶりがうかがえる。

江戸時代中頃から明治時代中期にかけて、大量の荷物を積んで北海道と大阪との間の商品輸送に活躍したのが北前船である。日本海側の北海道、北陸、山陰、下関、瀬戸内海を経て大阪、江戸と往来し、米や紅花、藍、海産物などを運んだ。酒田湊からは米以外にも出羽の紅花を積み、帰りには紅花で染めた京友禅やひな人形などが運ばれ、酒田は大いに賑わった。

北前船の寄港地として発展した背景には、庄内米の品質の高さや保管状況の良好さがあったとされる。酒田湊に集まる物資が多いことから、町人の中には藩の蔵米を保管する蔵宿を始めた、集まった物資を売りさばく問屋が次第に増えていった。酒田湊の繁栄により酒田のまちは大きくなり、1656（明暦2）年は1,277戸だった戸数が、1683年には2,251戸へと27年で約2倍近く増加した。酒田湊の繁栄と

ともに、古くから利用されていた最上川水運も整備され発達を遂げる。北前船で北海道と大阪を往復すると、千両（現在の価格で6,000万～1億円）もの利益が得られたとされ、海難事故は多く発生していたが、巨万の富を得ることを夢見る船乗りが後を絶たなかった。

米券制度と明治時代の庄内米

庄内藩は主力産業である農政に力を注ぎ、米の流通を円滑に行うための制度改革にも取り組んだ。その起源となったのが、1624（寛永元）年に郡代・柴谷武右衛門が創始した米券制度である。これは家臣の禄米を米札（米券）で支給し、年貢米は酒田や鶴岡などの蔵に収納し、いつでも米札を米に交換できるといものである。米札は米の売買にも利用され、貨幣同様に扱われた。1656年には米の売買を円滑に進めるために、米価の相場を決める米相場所を設けた。また入庫米の検査や品質管理、俵詰めを徹底して行った結果、庄内米は高い評価を得て庄内藩の米札は堂島など全国の市場に流通した。

明治時代になり年貢制度が廃止されると、厳重な品質管理が行われなくなり粗悪米が出回るようになった。庄内米も例外ではなく、庄内の地主は米穀改良組合を作り改良に取り組んだ。また、円滑な米取引の復活のため、酒田・鶴岡の米商が酒田米会社を設立した。その後、旧藩主・酒井家が全額出資して株式会社酒田米商会所を設立し、新井田倉庫を保管庫として厳格な品質管理を行った。それを引き継いだのが山居倉庫である。



風通しをよくし低温管理に貢献した山居倉庫の二重屋根



当時の山居倉庫の様子を伝える模型（庄内米歴史資料館）

山居倉庫

2021（令和3）年3月に国指定史跡に認定された山居倉庫は、1893（明治26）年に株式会社酒田米穀取引所の付属倉庫として建てられた米の保管倉庫で、惜しくも2022（令和4）年9月に129年続いた米倉庫としての役割を終えた。

酒田市街地の南東を流れる新井田川の左岸に建設されたのは、この場所から川を下ると最上川河口に合流してすぐに港があるという利便性の高い地点だからである。もともと河原だったところに約3.6mの盛土工事を行って周囲を石垣で固め、地盤を強固にするために倉庫の各礎石の下には約3.6mの松丸太杭を打ち込んだとされる。

米の収容能力は1棟当たり約1.6万俵（約960t）あり、倉庫は自然を利用した様々な工夫により低温管理がなされ、入庫米の厳しい選別審査などにより中央市場でも山居米の評価は高かった。倉庫の二重

屋根は土蔵と屋根の間に空間を作って風通しをよくし、積み重ねた俵の熱の放散と屋根からの伝導熱を防ぐ役割を果たした。樺並木は、日本海からの強い西風と夏の直射日光をさえぎり、倉庫内の温度を一定に保つ目的で植えられた。

新井田川沿いに立ち並ぶ山居倉庫と樺並木の風景は、庄内米の保管庫として栄えた当時の歴史を今に伝える酒田のシンボルであり、酒田観光のフォトスポットとしても有名である。

当時の面影を探して

酒田港や最上川河口が一望できる日和山公園には、当時、御城米を保管した御米置場（瑞賢庫）が設置されたことから、西廻り航路を整備した河村瑞賢像や庄内米を酒田湊から江戸に運んだ北前船の1/2サイズの模型が置かれている。まちの中心である本町通りには、酒田の発展に貢献した豪商・本間家旧本邸や廻船問屋・鍛屋などがあり、今も当時の酒田の繁栄に思いを馳せることができる。



日和山公園にある1/2サイズの北前船

- <参考資料>
- 1)『酒田の歴史』酒田市史資料展 本間美術館
 - 2)『酒田市史』上下巻 酒田市史編集委員会 酒田市 1987年
 - 3)『ジュニア版 酒田の歴史』ジュニア版・酒田の歴史編集委員会 平成27年3月31日改定版 酒田市教育委員会
 - 4)『酒田市立資料館 第220回企画展 解説資料』酒田市立資料館
 - 5)『酒田市立資料館 第225回企画展 解説資料』酒田市立資料館

- <取材協力・資料提供>
- 1) 酒田市立資料館

- <写真提供>
- P42上、P43右上、P43下、P44左上写真：惣慶裕幸
P45左上、P45右上、P45下写真：油谷百子